事例2

「自立した読み手」の育成を目指した授業

―伸びるための知識、そして体験―

1　授業改善の視点

知識は与えられたものをそのまま暗記しストックしておけばよいものではない。今後の実生活において活用されてこそ真の知識といえる。この様な知識は教師が生徒に教え込むだけの授業ではなかなか得られない。そこで、問題に直面したときに生徒自身が各自の知識を総動員してそれらの問題を解決していこうとする意欲や態度を引き出せる授業、さらには新しく学んだ知識を実際に生かす体験をさせる授業を目指してみた。英語に関する本校生徒の傾向として、以下の二つの点を挙げ、さらにそれぞれの点について授業改善の視点を述べてみたい。

第一点目は、例えば大学入試センター試験の文法・語法や語句の整序の問題の結果に典型的に見られるのであるが、授業や受験参考書などに現れた問題の形とやや異なった形で出題されるとたちまち得点率が低下してしまうのである。このことは英語の「読む」技能についてもいえる傾向である。見たことのある構文や語句が多く出現した英文の理解度は高いが、同じ構文や語句がやや複雑な形で出現すると急激に理解度が低下するのである。換言すれば、知識が断片的であり、それをそっくりコピーできる問題には強いが、そうでない問題には対応できないということである。この点を改善していくためには、教師側からの知識の伝授だけでなく、生徒が英語を「読む」際に問題点に直面した時、自分の中にある知識を総動員させ活用してその問題の解決に当たる訓練を日頃からしておかなければならない。

第二点目は、英文を日本語に置き換えるだけで精一杯、あるいはそれでよしとしている生徒の姿勢が見られるということである。英文を真の意味で理解する上で必要な英語の読物に対しての興味・関心や、筆者と読者の間のコミュニケーションが大変希薄である。「平成6年度教育センター学力向上を目指す授業改善検討委員会」の調査問題においてなされた研究の中心はまさにこの点にあった。この点を改善していくためには、読物についての背景知識を活性化することや筆者の意図や目的に合った読みの技術（すなわちテキストタイプ＝ジャンルに合った読みの技術）についての知識を与え、その技術を実際に生かす体験を通して身に付けさせることが必要である。

以上の点をまとめると、「持っている知識や技術を十分活用しながら意欲的・創造的に英語を読むことができる自立した読み手」の育成を目指した授業改善をしていかなければならないということになる。

2　授業改善の構想

高等学校２年生英語Ⅱにおける授業改善の構想を述べてみたい。使用した教科書はGenius English Course Ⅱ (TAISHUKAN)である。この教科書の本文は各レッスンにつき一つの題材が数セクションに分かれている形で記載されている。本稿ではその１セクション分の扱い方について改善の構想を述べる。

第一に、新しいセクションに入る際そのセクションの内容についての生徒の既存の背景知識の活性化や読む動機付けを図る活動を設定する。この活動は言語知識によってその言語を理解していく際大きな助けとなる。使用されている言語の難易度はほぼ同じなのに、背景知識や動機付けが豊富であったり強かったりした場合の方が大変読み易いということはだれしも経験したことであろう。

第二に、一度目の読みで細かいところにとらわれず本文の概要を把握させる活動を設定する。理由は今述べた第一点目と似ている。すなわち、最初の部分で理解できない箇所があったとしても、一度最後まで目を通したらその理解できなかった箇所が理解できたという経験は母国語においてもある。最初の行から余す所なく理解していかなければ全文を理解できないということは特別な場合以外はないはずであるし、実際に何かを読む場合実用的ではない。

第三に、二度目の読みで細かい点の理解に関わる問題点を解決させる活動を設定する。この活動は教師が問題点の設定や提示をし、生徒同士ペアあるいは数人でそれらの問題点について意見を交わし発表するというものである。この活動のねらいは個人を埋没させることを防ぎ、また教師による一方的な答えの修正や正解の解説の積み重ねで理解させるのではなく、生徒自身の力で問題点を解決し内容の理解に至ったという成就感をもたせることにある。

第四に、三度目の読みで筆者の意図や目的に合った読みの技術を向上させる活動を設定する。本来文章というものはそれぞれ異なった目的を持って書かれているものであり、読み方もそれによって変えるのが自然である。説明文であれば説明文の、物語であれば物語の読み方がある。ところが生徒はどんな文章でもいつも同じ読み方をする傾向にある。これでは興味・関心は次第に薄れていくし、努力に見合った内容理解の効率も低下する。

第五に、文章の内容が表現されるように音読させる活動を設定する。本文の内容を知らない英語の話者に対して、自分が音読した内容が伝わるかどうかという場面を想定して音読の練習をさせる。発音、強勢、連音、脱落音、抑揚、休止など音声に関わる全ての技術が必要となる。具体的には教科書付属の本文音読テープと同時読みができることを目標とする。頭ではできそうだと思っていても、実際に体験してみるとなかなか難しいものである。この活動は音読のみならず、スピーキングやリスニングの

技術の向上にもつながる。新学習指導要領に示されているコミュニケーション能力の育成に寄与する活動である。

3　実践の紹介

生徒　　高校２年生

主教材　Genius English Course Ⅱ Lesson 12 Differences in Politeness
(Section 3 p.134 l.6 - p.135 l.10) 195, TAISHUKAN

副教材　『欧米人が沈黙するとき』　直塚玲子　1980, 大修館書店
Genius English Course Ⅱ　指導ノートBook 4　1995, TAISHUKAN
READING POWER 1986, ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY

(1)導入（２.の第一点目に対応して）

教科書本文の原典『欧米人が沈黙するとき』からこのセクションに関連のあるエピソードを２例読みあげ、生徒の背景知識の活性化や動機付けを図ったり、同様の経験があればそれらの記憶を想起させたりする。このことによって本時の教科書本文を読む目的が明確になり、筆者の意図についての理解がより容易になることをねらった。次はその第１例である。

> 日本の進んだ工業技術を身につけるために、発展途上国からやってきた若者達が、...（中略）...「僕は独身です、と答えると、ガールフレンドはできましたか。まだならお世話しますよ。日本の女性は優しくていいですからね。などというのです。自分の恋人ぐらい、自分でさがしますよ。おせっかいもいいかげんにしてほしい、といらいらしてきますね。」

題材によっては写真、絵、雑誌、経験談などあらゆるものが活用できる。教師が日頃いろいろな面に関心をもち資料を集めておくと大変役に立つ。

(2)Signpost questions（２.の第二点目に対応して）

教科書本文についての一度目の読みの活動である。細かいところに捕らわれずに概要を把握する活動である。教科書本文と設定した設問は以下のとおりである。

The Japanese concept of politeness comes from mutual dependence, the attitude that "We all belong to groups," and that of Westerners comes from mutual independence, or "We are all individuals." These different concepts will be also the cause of another communication problem related to politeness.

Some Americans living in Japan for a coule of years get upset and say, "Japanese ask too many personal questions." Such questions as "How old are you?", "Are you married?" and "Don't you have any children?" are very personal. They say, "It's none of your business whether we have children or not." Questions about one's background are considered to be unnecessary and rude. They are an invasion of one's privacy. Westerners have a high respect for privacy, and they often avoid asking "personal questions" even of close friends.

To Japanese, however, such questions are taken as "aisatsu." If one fails to ask in detail about events in the other person's life, one seems cold and unfriendly. Japanese people view society as groups and group members. So a Japanese naturally wants to know as much as possible about a person before allowing him or her to cross the line dividing "them" from "us." Thus, such personal questions can be taken simply as "aisatsu" showing friendliness rather than curiosity.

①What does the Japanese concept of politeness come from?
②What does the Western concept of politeness come from?
③Why do some Americans living in Japan get upset?
④What do Westerners highly value?
⑤What do Japanese people think of personal questions?
⑥What do personal questions show in Japanese society?
(From Genius English CourseⅡ指導ノートBook 4 pp.24-25, 1995 TAISHUKAN)

制限時間を設け黙読をさせ6問全ての答えを見つけさせるという方法もあるが、今回は上から2問ずつ区切り、教師が設問を読んだり若干の言い換えをしたりして設問自体をしっかり理解させた後で一段落ずつテープを聞かせながら2問ずつ答えさせた。2問ずつ区切ったのは本セクションが3段落からできており、ちょうど各段落に2問ずつその答えがあるからである。この様に区切ったことによって、生徒の本文に対する集中力が高まり、応答も円滑に行われた。

(3)Grammar and translation（2.の第三点目に対応して）

教科書本文についての二度目の読みの活動である。言語面の正確な理解を得るために、いわゆるボトム・アップの読みを行わせる。教科書の本文を各行間一行分とりコピーし、その行間に設問を提示しておく。手順としてまず始めに各個人で１０分間の制限時間内にできるだけ速く設問の解答を見つける。その後、ペアで５分間検討し合う。このときに生徒は積極的に自分達の意見を述べ合ったり、教え合ったりしていた。他人に教えるということで自分の知識が深まったり、あるいは不十分なところが明確になったりした。改善の視点の一つに、自分自身の知識を新しい環境や問題解決に活用していく訓練が真の知識の獲得に必要であると述べたが、この活動がその大きな柱となればと考えている。

(Section 3 p.134 l.6-p.135 l.10)

The Japanese concept of politeness comes from〈mutual dependence〉,

〈 〉同格

〈the attitude that "We all belong to groups,"〉 and that of Westerners

関係代名詞？同格？(　　)　　=the (　　)(　)(　　)

comes from〈mutual independence〉,or "We are all individuals." These

「あるいは」？「すなわち」？(　　)

different concepts will be also the cause of another communication

problem related to politeness.　（以下略）

波線部を修飾する後置修飾「　　」

(4) リーディングタスク（2.の第四点目に対応して）

教科書本文についての三度目の読みの活動である。この活動のねらいは生徒にさま

ざまなテキストタイプ（ジャンル）に応じた読みの技術をできるだけ多く紹介し読みの技術のスキーマを形成させることにある。本課は論説文である。論説文には論説文を読む技術がある。それは筆者の論旨を整理しながら読むという技術である。その技術の導入練習として次のようなミニレッスンを設けた。

*Mini-lesson　　—論旨を整理しながら読もう(対比に注目！)—

次の英文を読んで下の表を完成しなさい。

American breakfasts are very different from breakfasts in Italy. In general, American breakfasts are much larger than Italian breakfasts. Americans may eat several different foods for breakfast. They may eat cereal and eggs and toast. Many Americans also like to eat some kind of meat. They don't drink strong coffee in the morning. On the other hand, Italians usually just have bread and coffee. They almost never eat meat early in the morning. And they always like their coffee strong and dark.

(From READING POWER, 1986 ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY)

breakfast

American	Italian
* several different foods such as cereal, eggs, toast and some kind of meat	* (1)＿＿＿＿＿＿＿＿
* (2)＿＿＿＿＿＿＿＿	* coffee is strong and dark

ミニレッスンでの留意点は、その目的を明記することと教科書本文よりも易しく短い英文を使うことである。目的が生徒に周知徹底していないと何を学ぶために活動を行っているのかあいまいで成就感が得られない。また難しい英語であると語句や文レベルの解釈に力が注がれ肝心の読む技術の習得に注意が向けられなくなってしまう。

次に教科書本文についてミニレッスンで練習した技術を実際に生かす体験をさせるために以下の活動を設けた。

*Target text　教科書のp.134 l.7-p.135 l.10について次の表の(1)-(5)を完成しなさい。

human society

Westerners	Japanese
* mutual independence "We are all individuals"	* mutual(1)＿＿＿＿＿＿ "＿＿＿＿＿＿＿＿"

↓

personal questions

Westerners	Japanese
* personal questions are unnecessary and rude	* personal questions are (2)＿＿＿＿＿＿
* personal questions are (3)＿＿＿＿＿＿	* ask personal questions in order to allow a person to (4)＿＿＿＿＿＿ ＿＿＿＿＿＿
* they have (5)＿＿＿＿＿＿	* personal questions show friendliness

以上の活動の特徴は練習と体験が一体となっているということである。そのねらいは、1.の授業改善の視点でも触れているが、得た知識を単なる知識の記憶に終わらせることなく、新たなテキストに活用できてこそ真の知識であるという体験をさせることにある。そしてこの様な体験を積み重ねていくことによって、将来新たに遭遇するであろうさまざまなテキストに合った読みの技術を適宜応用していける能力を持つ「自立した読み手」に生徒が成長してくれることを目指した活動である。

(5)Reading aloud practice　(2.の第五点目に対応して)

この練習の目標は、新学習指導要領に示されているように文や文章の内容が伝わるよう音読ができるようになることである。実際の授業では各セクションについて(4)の

リーディングタスクが終了した最終段階で次のような練習を設定し行わせた。

①Lip reading→②Shadowing→③Pair reading practice→④Shadowing→⑤Pair reading in the class

①はテープと同時に唇を動かしながら聞こえるか聞こえないくらいの音量で読んでいくものである。②のためのWarm upでもある。また発音しにくい単語やテープに追いついていくのが難しそうな箇所でテープを止めて若干の練習を行う。②はテープと同時に音読するものである。この段階ではまだうまくついていけないが何とか努力をしている。③では全員起立しペアを作り１文ずつ交替で音読し合い、終わったペアから着席する。競争意識や一種のゲーム感覚が働いて生徒は熱心に取り組む。各段落毎にパートナーを変えてやるとマンネリ化が防げる。④は②と同様のものであるが、③の成果が出て音読に大きな進歩がみられる。同時読みをさせるねらいは自然な発音、強勢、連音、脱落音、抑揚、休止などを身をもって体験させることにある。テープを聞いているときにはあたかも自分はテープの様に音読できると思っていても、実際に同時読みをさせられてみるとそれは単なる思い込みであったということに気付かされるのである。⑤がこの音読練習の最終目標である。その際肝心なのは音読の指名を受けたペア以外の生徒は全員教科書を閉じて聞くということである。本来の音読の目的は内容が伝わるように音読するということであるから、聞き手が視覚を介さずに理解できるかどうかがその音読の真の評価となる。また教科書を閉じることによって、音読を指名された生徒に対する他の生徒による間違い捜しを防ぐことができ、従って読み手も緊張の中にも安心感をもって音読できるという付加的な利点もある。

(6)アンケート集計結果

授業実践の後、生徒に対して行ったアンケート項目とその結果を示しておく。

1. Signpost questionsは本文のおおまかな内容理解に役立ちましたか。
　役立った　７６％　　役立たなかった　２０％
2. 文法の質問事項
　今回くらいのポイントでよい　８４％　もっと細かく　１３％
3. 表を完成する活動について、論旨の流れを整理するのに
　役立った　８０％　　役立たなかった　２０％
4. 授業全体について
　自分で考えた後に話し合う授業がよい　８４％　講義調がよい　１３％

４実践のまとめと今後の課題

今回の実践のねらいは、問題に直面したときに生徒自身が各自の知識を総動員してそれらの問題を解決していこうとする意欲や態度を引き出せる授業、さらには新しく学んだ知識を実際に生かす体験をさせる授業、をどの様に普段の授業の中に構築してでいくかにあった。新学力観の見地からすれば、意欲・関心をどの様に引き出して物事を考えさせ、どの様にして真の学力あるいは知識を身に付けさせていったらよいのかを実際の授業を変革していくなかで探求するということでもあった。実践授業の後、生徒に行ったアンケートの４番目の項目で、授業全体について講義調の英語の授業の方がよいが１３％、自分で考えた後生徒同士で話し合う英語の授業の方がよいが８４％であった。この様な形態の授業は生徒に受け入れられたようである。もちろん話合いの授業が適さない場合があるということを認識した上でのことではあるが、できるだけ機会をとらえて生徒達の力で問題解決をしていく授業が実践できたらと考えている。正解か誤答かの二者択一的な知識ではなく、話合いの中で自分はどこまで到達しているのか、何が不足しているのかといった伸びるための知識に対する認識が生まれてくれることを願っている。またこの様な伸びるための知識が実際に生かされる場面を体験させてやることが大変重要であると考える。なぜならばその体験が次の新たな場面での意欲・関心につながっていくからである。これらの実践の効果はすぐ目に見えるかたちでは現れにくいが、日々の授業で以前に比べさらに意欲的に学習に取り組んでいる生徒の姿勢がうかがえる。

今後の課題としては、知識→体験→意欲・関心→知識という有機的なつながりをどこまで効果的に授業の中で構築していくことができるかにある。今後も研讃に努めていきたい。

（新潟県立新潟南高等学校教諭　永村　邦栄）